

学校視察報告（中央大附属中学校・高等学校）

主幹教諭 早坂晴子

1. 目的：「ジャパンナレッジ school」の授業、探究活動への活用を学ぶ（2004年に JKS を導入）

2. 訪問日：令和6年11月19日（火）

対応者：平野 誠 先生 専任司書教諭／総務部主任 理科（生物）

※平野先生は授業は担当せず、図書館専任、授業、探究活動と図書館をつなぐ。

北島咲江 先生 国語科教諭



中央大附属高校 図書館にて（平野司書教諭、早坂晴、小野）

3. 中央大学附属中学校・高等学校について

◆所在地：東京都小金井市貫井北町 3 丁目 22-1

◆沿革

- 1909（明治 42） 目白中学校設立認可 4 月東京府豊多摩郡落合村（現・新宿区下落合）の近衛家屋敷内に、東京同文書院に併設して創立 初代校長に侯爵 細川護成就任
- 1935（昭和 10） 東京市杉並区中通町（現・杉並区今川）に移転し校名を杉並中学校と改称
- 1951（昭和 26） 学校法人杉並高等学校設立認可
- 1952（昭和 27） 学校法人中央大学に合併認可、校名を中央大学杉並高等学校と改称
- 1963（昭和 38） 東京都小金井市貫井北町に新校舍竣工、中央大学附属高等学校と改称
- 2010（平成 22） 中央大学附属中学校開校

◆進学実績（2024 年）

中央大学進学率86.09%

中央大学法学部 105名 経済学部 59名、 商学部 64名 理工学部 33名
文学部 27名 総合政策学部 21名 国際経営学部 11名
国際情報学部 11名

他大学進学

（国公立）北海道大、筑波大、東京学芸大、横浜国立大、阪大、東京都立大

（私立）慶応大、上智大、東京薬科大、東京理科大、早稲田大、立教大、日本医科大、獨協医科大 探

◆探究活動について

中学 3 年「教養基礎」、高校 1 年「教養総合Ⅰ」、高校 2 年「教養総合Ⅱ」、高校 3 年「教養総合Ⅲ」興味関心を育て、2 年生で 10 程度のコースに分かれて、国内、国外でのフィールドワークに臨む。3 年生は自ら設定したテーマを考察し、文系は論文、理系は卒業研究として発表する。

① 卒業論文(文系) | 万字の執筆・・・24 年めの取組

審査の上、優秀作品「蒼穹賞」を表彰。毎年最優秀、優秀、佳作を生徒会誌「蒼穹」(2024 年は 26 号)に掲載。掲載は非常に名誉なことで、「第〇回『蒼穹賞』だった〇〇さん」のように称される。

2024 年受賞テーマ

最優秀賞「高尾山のムササビを守るために～分布調査と GIS 分析から考察する未来の森林～」

優秀賞「醤油かすで作ったお椀で日本食を食べよう!—アルファ化米×醤油かすで食器用素材を作る」

佳作「『枕草子』「殿などのおはしまさで後」の段における山吹の花の解釈を巡って」

・論文指導・・・書き方、形式等について国語科を中心に授業内で系統的に指導をしている。

・内容、形式、引用等への配慮についてもしっかりしている。査読付学会誌等へも対応可能と思われるレベルである。(掲載作品への印象)

② 卒業研究(理系)

高大連携事業の一環として、中央大学理工学部のキャンパスで教授を前にプレゼンを行う。(事前指導を受けながら研究をまとめあげている。)

4. 特色ある図書館とジャパンナレッジ school 活用について

◆図書館について

「中附×図書館=∞」というキャッチフレーズが高校紹介パンフレットの最初のページに載るほど、図書館が学校、および地域の特色となっている。

「20 万冊の所蔵資料」「資料検索システム・オンラインデータベースの完備」「PC80 台設置」40 人×3 クラス分の授業展開が可能である。まさに「読書センター」「学習センター」「情報センター」を体現する図書館である。常駐スタッフは、図書館司書 6 名、専任司書教諭(平野先生)1 名で構成されている。



1978 年建築、建築賞受賞の図書館。内部にはフランスのインテリアランプが並べられ、インテリアデザインも秀逸である。

◆ジャパンナレッジ school 活用について

ジャパンナレッジ school (JKS) を導入して 20 年経過。特別感はなく、データベースの一つとして日常的に活用している様子がうかがえた。

【参考にしたい点】

① 「『Google のベタ打ち』ではなく、ナレッジを通す」

何かを調べたいとき、生徒たちは Google の検索ボックスに言葉を打ち込む。検索結果には玉石混交の情報が並び、本当に必要な情報、信じるに値する情報を選択するのは難しい。ほんのひと手間、「ナレッジ (JKS)」にログインし、JKS の検索ボックスに打ち込むことによって、信頼できる情報、探究・研究に引用してもよい確かな情報が得られる。

② 「まずは百科事典です」

JKS に搭載されている 2 種の百科事典『日本大百科全書』(小学館、全 25 巻、月 1 回アップデート)、『改訂新版世界大百科事典』(2021 平凡社、全 34 巻) の二つで調べることで十分な情報が得られる。あらゆる教科、探究活動、進路学習、すべてに対応できることから「まずは百科事典で調べることを大切にしている。

5 視察を通して

生徒や教職員が日常的に図書館、および JKS を活用している様子がうかがえた。ご案内いただいた平野先生はお名前を検索(まさに Google のベタ打ち...)すると、複数の取材記事が浮かび上がる「図書館活用の第一人者」として有名な方である。常に「使いやすい図書館」を心がけていらっしゃる様子がうかがえた。「図書館で授業をしたい、と突然先生が訪れても、私はいいですよ、ということにしています。」という言葉が印象に残っている。

国語科の北島先生の「雑誌作り」の授業はメディアリテラシーの観点からも、「読む」「書く」力を伸張させる観点からも魅力的であった。図書館を舞台に、複数の雑誌を読み比べ、「求められる読者像」を分析した上で雑誌を作成する探究的な取組である。また、考査ごとに 3 冊の課題図書を読し、課題図書の内容を問う考査問題にも感心し、帰校後、一部取り入れるに至った。「教科書本文をネタに出題するテストは、ただの暗記テストですよ。身につけたい力とは違います。」と言い切る姿勢にハッとさせられた。



左: 中学図書館(第 2 図書館)はマンガと洋書に特化
もちろん、授業で利用できる配置になっている。

右: 高校図書館の窓辺にはフランスのデザイナー
による美しい照明が並んでいる。放課後、高校生
が照明のもと新聞を広げて読んでいた。



1. 訪問日：令和6年11月20日（水）

対応者： 宮嶋 淳一 統括校長
小出 千亜希 主幹教諭（進路主任・Microsoft 認定教育イノベーター）
千田 つばさ 司書

2 沿革

明治 41 年東京府立第四高等女学校として開校

昭和 22 年定時制新設

昭和 23 年東京都立第四女子新制高等学校と改称し、新制中学を併設

昭和 24 年男女共学実施

昭和 25 年東京都立南多摩高等学校と改称

平成 22 年東京都立南多摩中等教育学校開校

「人間力の南多摩 一心・知・体の調和」を教育理念とし、6年間を通して“確かな学力”を身に付けさせ、新たな価値を創造し、主体性を持ってリーダーとして活躍できる人材の育成を目指している。

3 進学実績

2023年度卒業生152名

現役大学進学率94%以上

国公立大現役合格率46.1%

東京大学 現役9名 既卒2名

東北大学 現役4名 など



4 探究活動について

1 学年から6 学年までそれぞれ学年ごとにテーマを持ち、ステップアップしながらフィールドワーク活動を通して探究活動を進めている。

1 年＜地域調査＞

グループで多摩地域の事物について現地調査しアピールする。

2 年＜モノ語り＞

グループで人が作ったモノを6つの視点から調査し、報告する。

3 年＜科学的検証＞

グループで科学的検証に挑み、結果をプレゼンテーションする。

4ー5 年＜ライフワークプロジェクト＞

個々に問いを立て仮説を立てて検証する。4 学年で中間報告としてポスターセッションを行い、5 学年で学術論文の形態で発表する。

5 図書館利用について

探究活動での利用の他、国語の授業では日常的に利用しており、他教科での利用もある。国語の授業では、教室でジャパンナレッジ等を使って検索したり学習した作品についても、実際の本を見せることや、古典の名作など全集の分厚さ、何冊もあるなどを実際に見て感じる体験を大切にしているというお話もあった。一方で、授業者が使用する発表資料、生徒が作成するレポートなども、複数の IT ツールを利用しており視覚に訴えるものがある。ツールの種類や使用するかどうかも生徒自身に任せられており、一緒に学ぶ中で教え合いや刺激を受けることもあり、個別最適化の視点と一斉授業の良さが共存している様子が見られた。



6 進路指導について

進学プラン、キャリアプランに分かれた目標を掲げて、6年間の中でステップアップしながら進路目標達成を支援している。卒業生がチューターとして現役生徒をサポートしている。廊下には進学した大学について紹介するポスターが廊下に展示されていた。



7 視察を終えて

探究活動や進路指導、教科の指導についても、6年間を通しての目標が明確にされており、生徒が力を伸ばしていく良い環境であることが感じられた。体系立てられた探究活動についても、企画を担当する教員チームを中心に、毎年現状に合わせて工夫と改善を加えているということであった。また、図書館と連携した授業についても生徒の意欲を向上させる様々な工夫が凝らされていると感じた。授業者が「楽しいんじゃないか」あるいは「難しいがやりがいがある」と思い準備する授業が、生徒にとっても意欲をそそられる授業になるのだと実感した。